

2021 年四旬節黙想講話

「宣教する教会—イエスと共に、  
イエスのミッションを生きる喜びに満たされて」



講師：小暮康久神父様（イエズス会）

2021年2月21日 四旬節第1主日

## はじめに

上石神井にあるイエズス会黙想の家霊性センターで働いている小暮神父と申します。

今日は四旬節の始まりにあたって皆さんと私たちの信仰の喜びを分かち合うときをいただけたことを心から感謝いたします。このときを神様が豊かに祝福し、私たち一人ひとりをご導いてくださるようにお祈りで始めたいと思います。(祈り 略)

昨年、3月1日の四旬節第1主日のために依頼された講話について、稲川保明神父様と石井さんに黙想の家へ来ていただいて、打ち合わせたことをもとに、この「宣教する教会—イエスと共に、イエスのミッションを生きる喜びに満たされて」というタイトルにしました。結局、昨年は中止となり、予定は順延されて、きょうに至ったわけですが、「テーマは？」と尋ねられたとき、やはり同じテーマにしようと思いました。

それは、この1年の間、新型コロナウイルスの感染対策ということで、ある期間、ミサが非公開になり、その後、再び公開されても人数制限やソーシャルディスタンスに留意することとなっています。こうして、いつも教会に集まれる状況でなくなったなか、私たちには、新たに信仰や教会の本質が問われてきているのだと思います。しかし、日曜日に教会に来られる状況でなくなったとしても、私たちの信仰と教会の本質は揺らぐことはありません。その意味で、コロナ禍の1年を経て、“それでもなお”というより、むしろ、“それだからこそ”、同じタイトルで皆さんと分かち合いをしたいと思いました。

四旬節のミサの叙唱（四旬節 二 一回心の時一）の中で、

(あなたは信じる民の回心を望み、この恵みの時お定めになり、)  
過ぎ行くこの世にあるわたしたちが心のおごりを捨て、  
永遠に変わることを求めよう導かれます。

と祈ります。そこに私たちの信仰、そして教会の変わらない本質があると思います。

また関町教会の保護の聖人は幼きイエスの聖テレジアであり、関町教会のホームページを見ると「テレジアのように祈り、ザビエルのように伝えよう」というとても素敵な合言葉があります。そのテレジアやザビエルの姿の中にも、信仰と教会の本質があると思います。そのことも、一緒に味わっていただけたらと思います。

## 宣教とは、私たちを通して神の力があふれていくこと

まず、「宣教する教会」の「宣教」とはどのようなことなのか。聖書の中でそれがどのようなかたちで出ているのかをご一緒に確認したいと思います。「宣教」という言葉が語られているのは、4つの福音書中の結びの部分です。例えば、マルコ福音書16章15節から20節です。

その後、11人の弟子たちが食事をしているとき、イエスが現れ、……言われた。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば治る。」

主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。一方、弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。

次です、大事なのは。

主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりとお示しになった。

これがマルコの結びに書かれている宣教の姿です。ここから味わえるのは「主は彼らと共に働き」ということです。福音宣教は、弟子たちが行って、がんばってやったという話ではなくて、主と共にやっていた。だから、「悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば治る」のです。このようなことは、ないとはいえませんが、日常的に私たちが経験できることではありません。でも弟子たちはこれをしていたというのです。

なぜか。それは、弟子たちの宣教が主と共に行われていたからです。これは、私たちが宣教を考えたときのひとつの大切なポイントだと思います。つまり私たちは、人間の力で福音宣教するのではないのです。福音宣教の第一義的な力の源泉は主ご自身です。私たちが主と共にあるとき、私たちを通して、神の力がこの世界にあふれていくのです。

### シュネルギア——聖霊との協働

このように、宣教が人間の自力、つまり人間の業ではないということ、神と共にいるときに神の働きがこの世界にあふれることであることを示すギリシア教父の言葉があります。

私たちのローマカトリック教会には 2000 年の歴史がありますが、私たちが唱えている信条とか神学的ないろいろな大切なものは、イエスが十字架にかけられて復活して聖霊降臨によって教会が誕生して、そこから 400 年から 450 年の時間をかけて少しずつ神の導きの中でくっきりとはっきりと創られていきました。その時に教会をリードしていたのは主にギリシア語を話す教父たちです。

そのギリシア教父たちがどんな言葉を私たちに残しているかといえば、「聖霊との協働」ということを意味する「シュネルギア」という言葉です。あまり聞いたことはないかもしれませんが、「シュン」というのは「一緒に」という意味で、「エネルギー」というのはエナジー、エネルギー、働きとか力という意味です。つまり「シュネルギア」というのは「一緒に働く」という意味の言葉です。弟子たちの宣教はまさに主と共に働いていた、主は彼らと共に働いていたということですから、まさにシュネルギアです。

この神の恩寵と私たちの自由な応答があるとき、すなわち、強いられてではなく、本当に神様につながって、私たちがそこに神を感じながら動くとき、そこにはものすごい力が働きます。恩寵と自由——あるいは日本でよく使われる言葉でいえば——他力と自力がひとつになっているということです。他力だけでもだめです。自力だけでもだめです。自力だけでだめなことは、私たちは経験的によく知っていますね。でも他力だけでもだめなのです。だから、イエス様は必ず「見えるようになりたいか」と聞きます。その人は見えない苦しみの中でいろんなものを背負ってきた、その人の根っこのいちばん深いところから「見えるようになりたい」という叫びのような願いがほとぼしった瞬間に、目が開くわけです（マルコ 10：46-52 参照）。

神様は私たちに自由を与えています。私たちは特別な被造物です。まったくの神の似姿という、想像を絶する被造物です。この被造物に何が付与されているかというと、それは自由です。この自由がまったくの神秘で、自由であるがゆえに、私たちはいろいろなものを選ぶことができます。きょうのミサの福音朗読（四旬節第 1 主日 B 年 マルコ 1:12-13）で読まれた、イエスの荒れ野での誘惑の話のように、石をパンに変えるという選べることをすることができるのです。でもそこで石をパンに変えないという選べるし得るのはなぜか。それは、私たちが神につながっているときに、何が私たちにとって最もふさわしい

かを味わっているからです。

この自由の中で私たちが応答していき、自力と神の恩寵とがひとつになったときに、私たちが奇跡と呼ぶものがこの世界に現出するのです。だから、いつも私たちの協力を必要としています。

イエスは故郷に帰られたときに、故郷の人々があまりにも不信仰だったために奇跡を行うことができなかったと言われています（マルコ 6:1-6; マタイ 13:53-58 参照）。つまり奇跡には私たちの応答が必要なのです。そういう意味で、弟子たちは本当にシュネルギア、主と共にあるという中で福音宣教を主と共に進んでいた、これがマルコの報告だと思えます。

パウロの「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ2:20）というところまで行くと、本当に主と共にひとつになっています。働きにおいて、パウロからイエス・キリストがあふれているのです。

使徒言行録で描かれているのは、教会がどうやって誕生したかです。この聖霊降臨の瞬間に教会は誕生したのです。教会共同体の一人ひとりに、聖霊がどんなにあふれるように働いているか、ということの詳細な報告が使徒言行録です。聖霊において主が使徒たちと共に働いていたのです。ここに宣教の鍵があります。

### イエスのミッションを生きる

もうひとつ、マタイ福音書に、派遣命令というものがあります（マタイ 28:16-20）。

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスの指示された山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「私は天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼(バプテスマ)を授け、あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

このようにイエス・キリストの生涯を物語る福音書の結びは、ミッション（派遣）で終わっています。つまりキリスト教というのは「私が救われたらよい」ということではないのです。「私たちが救われるためにどうか私と一緒に働いてほしい」というのがイエスの願いです。「あなたがたが私と一緒に働くとき、私はいつもあなたと共にいる」と。

もちろん、イエス様はいつも私たちと共にいるのですが、もっと言うならば、「私がいつもあなたと共にいることをあなたが体験する」のです。どこで？ ミッションにおいてです。

「天の父は今も働いている。だから私は働くのだ」——これがイエス様の姿です。

だから、キリスト教というのはものすごく積極的なものを本質としてもっているのです。「私が救われたらよい」ではないのです。全世界を救うために働いておられる神様の愛に私も入っていく。このミッションが本質です。そこで私たちは最も豊かに神様と出会っていくのです。

一人ひとり置かれた場所は違います。たとえば、私は神父です。家庭を持っていないので時間もたくさん使えるでしょう。でも皆さんは家庭があって子育てがあって、いろんなことがあります。使える時間が違うのです。だから私のようにここでお話をするばかりではなく、一人ひとりが置かれた場所でミッションを行うことができます。

私たちがイエスのミッションを生きるというとき、「そうだ、そうしよう」と言ってできればいいのですが、どうもなかなかそうではないという現実を私たちは体験的に知っています。

それはなぜか。

そもそも、神が人の子となられたのは、私たちを救うためです。ということは、私たちはどこかから解放される必要があるのです。それを私たち教会の言葉では罪といいます。イエスの40日の荒野での姿は、私たちに福音宣教の本質、根底に流れているのは霊の識別であるということを示しています。

これは、「イエスは洗礼を受ける必要があるのですか」という話です。ところが、イエス様は「今受けさせてほしい」と言うのです。なぜか。私たちに洗礼が何かを示すためです。イエスが洗礼を受けたときに何が起こったか。天が開きました。そして聖霊が鳩のように降ってきたのです（マルコ 3:13-17）。洗礼によって、なにか私たちの命に“永遠の開け”が生まれるのです。

私たちはクロノス（＝経過する時間）という目に見える時間と空間の世界の中を生きているのですが、この目に見える時間と空間の世界というのは移りゆくものです。私たちが洗礼を受けると、この目に見える移りゆく世界の中に、垂直に“開き”が起こります。その開いたところは永遠です。洗礼によって、その命の中にあなたたちがつながるといふ現実が今始まるということ、イエスは私たちに示しています。

### 神から離れてつくるもうひとつの中心

私たちはクロノス、時間と空間、物質と精神の世界を生きているのですが、私たちの pneuma（霊）はそれを超えています。なぜなら神の似姿だからです。創世記を読むと、その3章で何かが起こっています。

（男と女が造られたとき）「人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった」（創世記 2:25）——まったく神様と一緒にいた。園の中央には、命の木と善悪の知識の木の2本だけが生えていました。でも神は、「善悪の知識の木の実だけは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と言います（3:3 参照）。実際に二人は善悪の知識の実を食べました。でもそのあとも、聖書の記述として、現象としては二人がそこで死んだわけではなくて、動いてやりとりしています。死んではいない。ただ、何か本質的に変容したということ、創世記3章は語っています。

何が変わったのか。食べた瞬間、裸であることを知って、自分の姿を別の景色として眺めました（3:3）。そして、自分をまず否定しました。それから手を伸ばしていちじくの葉をつかみます。神の足音が聞こえたとき、木の間に隠れました（3:8）。アダムは何と言ったか。「あなたの足音が聞こえたので、恐ろしくなって隠れております。わたしは裸ですから」（3:10）と言いました。恐れている私は明らかに神から距離をとっています。これがもうひとつの私たちの現実です。

この善悪の知識の実ですが、被造物が善悪を知るようになるわけがありません。被造物とは、そもそも本質的に制約、制限の中にあります。神は無制約です。全知全能です。私たちは存在者、トマス・アクィナスの言葉で言えば、エンス（ens）です。エンスとは存在者のことです。たとえば、この時計も、この水の瓶もエンスです。猫も犬もエンス、私もエンスで、太陽もエンスです。それに対して、神様はエッセ（esse）であり、存在そのものです。エンスは指さすことができます。言語はもともとエンスに対して名指しをする、指をさすものです。しかし、神はこのようなかたちで指をさすことはできないものです。神は存在そのものだからです。ただ、私たちが何か理解したり味わったりするときに、私たちのその理解の中で、概念として名指しします。それで、神について人は語るすることができます。でも、それはいつもそこを超えていく味わいがあります。そういう私たちが善悪の知識の実によって「善と悪がわかった」のではなくて、「善と悪を私は知っていると思い込んだ」のです。なぜなら、私が神から離れてもうひとつの中心を作ったからです。これが自己中心性です。パウロの言葉で言えば、肉（ギリシア語のサルクス）です。この自己中心性により、私たちの本来の場所、私たちは神の似姿として本来の場所

を持っているのですが、もうひとつの場所ができた。ボールに喩えると、野球のボールもゴルフのボールも、真ん中に芯があるからまっすぐ飛ぶのです。もし真ん中から1cmずれたところに別の重りが入っていたら、そんなボールはもうまっすぐ飛ぶわけではありません。そのような状態です。

### 私たちに霊が与えられている

私たちはそもそも、神の似姿としての霊（ギリシア語「プネウマ」）が与えられています。

出エジプト記3章13節で、モーセが神に名前を教えてください、きっと皆に訊かれるからと言うと、神は、聖書の中ではそこで初めて、ご自分の名前を明かされます。

日本語の聖書だと、「わたしはある。わたしはあるという者だ」（14節）とあります。ヘブライ語の原典を読むと、「エヘイエ アシエル エヘイエ」と書いてあります。「エヘイエ」というのは「ハーヤー」という動詞の一人称未完了形で、「ある」というよりも「なりつつある」ことを意味します。つまり、「わたしはある。わたしはあるという者だ」は「ある」ではなく、「なりつつある、かつ、なりつつある」ということですから、命そのものというのでしょうか。

私たちがこの時間空間の世界で普通に味わうことができるのは「永久」です。これは時間の継続のことです。すごく長い時間が流れていく、というのはあくまでも「永久」のことです。私たちが「永遠」と呼ぶのはここ（図の点線の上側）です。もともとこの世界の話ではありません。「永遠の命」というのはこの時間の中で不老不死のようにずっと生きていけるという意味ではありません。この世界を突き破ることを意味しています。

神は愛（ギリシア語「アガペ」）そのものです。そこに向かって開けている存在が、私たち「ひと」、神の似姿としての本来の姿です。私たちは単なる霊的存在ではなくて、一人ひとり具体的な身体を持っています。この目に見える部分が身体です。それだけではなくて、私たちは心とか精神と呼んでいるものを持っています。目には見えず、どこにあるかわからないのですが、ただ確かにこの世界にあります。それをギリシア語でプシュケーと呼びます。精神・魂のことです。

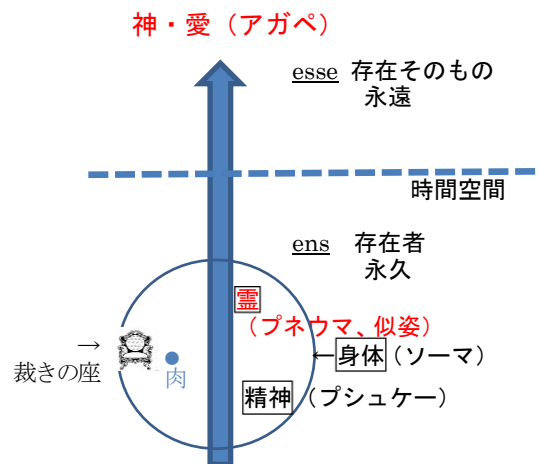
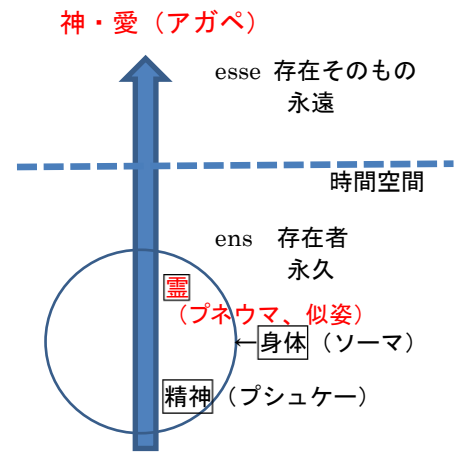
神は愛（ギリシア語「アガペ」）そのものです。そこに向かって開けている存在が、私たち「ひと」、神の似姿としての本来の姿です。私たちは単なる霊的存在ではなくて、一人ひとり具体的な身体を持っています。この目に見える部分が身体です。それだけではなくて、私たちは心とか精神と呼んでいるものを持っています。目には見えず、どこにあるかわからないのですが、ただ確かにこの世界にあります。それをギリシア語でプシュケーと呼びます。精神・魂のことです。

私たちは、神からの霊であるプネウマと、プシュケー（精神）とソーマ（身体・体）、この3つをもった存在です。これが、パウロの言う人間です。私たちの霊も魂（精神）も体もなにひとつ欠けたところのないものとして、神が守ってくださるようにと、最後にテサロニケの仲間たちと別れるときに言っています（一テサロニケ 5:23）。これが本来の私たちの姿です。

ただ、もうひとつの現実として、なぜ識別が必要かということ。図の垂直の矢印のところにあれば、私たちは神にまっすぐ開けていて神を親しく感じているので、まったく迷いようがありません。

ところが、善悪の知識の実を食べるという現実の中で、ここにもうひとつ中心ができました。それが肉です。パウロはサルクスと呼んでいるのですが、自己中心性のことです。ここは、「何が善で何が悪かはこの私が決める」という場所です。だから、私から見て、私の景色から、「この人だめな人だね」とか「ここはこうしたらいいのに」とか、絶えずぶつぶつ言っているのです。

言わば、ここに椅子があるのです。これが裁きの座で、



ここから眺めた景色で語るのです。

取って食べるなど命じた木から食べたのかと、アダムが神から訊かれて何と彼は答えたのか。「あなたが造ったこの女がわたしにくれたので食べたのです。わたしは悪くありません」というような言いごまです（創世記 3:12 参照）。そして（神が）エバに「なんということをしたのか」と言うとエバは「わたしじゃない。この蛇のせいでわたしは食べました。わたしは悪くない」と言います（同 3:13 参照）。つまり裁きの座に立っているのです。

私たちが、本当に「この石をパンに変えるかどうか」ということを選ぶときに、この椅子からなのか、あるいはこの椅子から離れたところからなのか。さきほどのボールの話のように重心が 2 つあるので、善悪の知識の実を食べる前のように、ボールはまっすぐには飛ばないのです。

旧約聖書では「まっすぐ」というのは「ツェデク」と言い、「義」と訳されます。旧約聖書で「義」というのは「関係性をまっすぐに生きる」ということです。「アブラムは主を信じた」という創世記 15 章 6 節は、原文をそのまま日本語に訳すと、「彼は自分自身でしっかり立った、於いて、ヤーウエ」ということです。ここ（図の垂直の矢印の位置）に立ったということです。ここに立った瞬間、まっすぐに開けたのです。その瞬間神様は、「アブラム、それが義なのだ」と言ったのです。「そこ、その場所」と言ったのです。アブラムはそのあとも元に戻ったりしますし、それが私たちの現実なのですが、しかし少なくとも、私たちの信仰がどこに立つべきかということをはっきりしました。

### 「裁きの座」

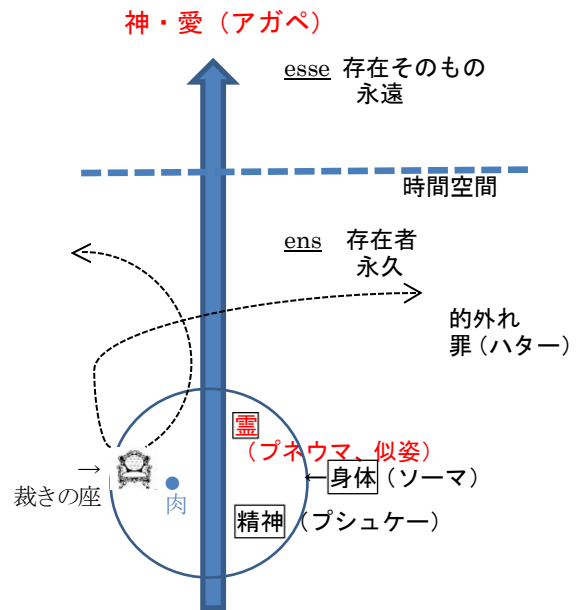
偶像崇拜というのは、裁きの座に座った状態で、「私はいが欲しい」「これが欲しい」と言っているのです。ここに座った状態ではまっすぐに飛ばないので、**曲がった矢印**のようになります。全部この**点線**から下です。上には絶対突き抜けません。

この曲がった状態が的外れで、旧約聖書のヘブライ語で「ハター」と言い、これが私たちの聖書で「罪」と訳されているものです。罪と訳されている言葉は、ハターのほかにもアウォンとかペサーなどがありますが、全部このように線が曲がった状態を言います。旧約聖書が語るのは、まっすぐな矢印と曲がった矢印の 2 つの話です。私たちにこの 2 つの現実があるということです。

でも、旧約聖書は、この私たちに向かって外から律法とか預言者が一生懸命「神に立ち帰れ」と言っているものです。でも外からです。椅子に座っているのです。ダビデもそうですが、一瞬、「わたしは主に罪を犯した」つまり、的外れだった、と気づくのですが、**中央の矢印**に戻る力が圧倒的に弱々しいのです。裁きの座は、「自力のみ」の場所ですから、自分の力で義を達成しようと思えば思うほど曲がっていきます。それがファリサイ派です。ファリサイ派はこの椅子の極みです。

では、自分の力でこの椅子から立てないのに、どうやって戻るのか、です。だから神ご自身が中に入った。それが受肉です。

パウロが、「もはや生きているのはわたしではない。わたしの内側でキリストが生きておられる」（ガラテヤ 2:20）と言ったその現実が、イエス・キリストの受肉によって私たちに訪れています。だから今や、この真ん中から霊の息吹が、私たちに気づきを促しながらずっと吹いているのです。「ここではない」

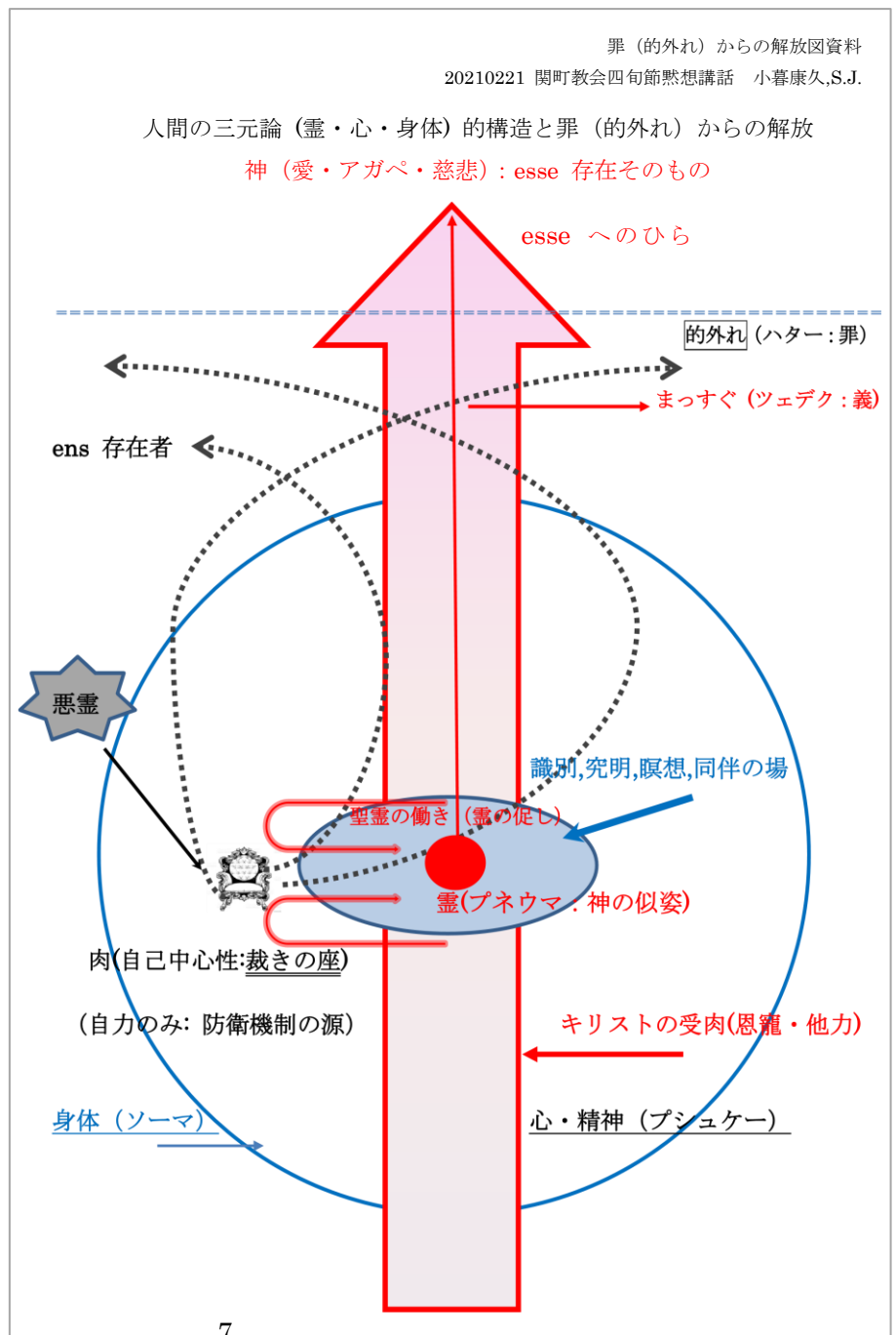


と。この風を聴き取っていく。椅子に気づいていく。それが識別です。聖人はこれをしていきます。例えばペトロの姿です。

私たちの現実として、この霊の息吹に息吹かれるという現実と、またひゅっと椅子に戻ってしまうという現実があります。人生の中で、椅子から立って気づいたり、また霊に息吹かれたり、そうしながら、**中央の矢印**がすごくリアルになったのが聖人です。聖人は自分の力でやっているとは微塵も思っていません。聖人になればなるほど、自分にはまだこの椅子があるということで胸を叩きます。でも圧倒的に神の恵みに対して開けているのです。

(マタイ 16 : 13~17 節では)「人々はわたしのことを誰だと言っているか」とイエスから訊かれたとき、弟子たちは、「エリヤだと言っています」とか「ヨハネだと言っています」とか答えるのですが、「ではあなたがたはわたしを誰だと思うのか」とイエスに訊かれたとき、ペトロは、ピコーンと閃いたのでしょう、「あなたはメシア、生ける神の子です」と言ったのですが、その瞬間イエスは、「ペトロ、それは今自分から出てきたのではなくて、そのことを示したのは人間ではなく、天の父なのだ」と言います。つまりその瞬間のペトロは、**中央の矢印**のところで受け取っているのです。その感覚なのです。

でもその直後です (マタイ 16 : 21~23)。イエス様が「祭司や律法学者たちに迫害され処刑されて 3 日目に復活する」という受難の予告をしたときに、ペトロは体験だけで生きている人ですからまったくの善意から、そんな心配をしなくて大丈夫、わたしたちがついているからと、「そんなことがあってはなりません」と言った瞬間にイエス様は「サタン、引き下がれ」と言うのです。「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」——つまり、どんなに良い眺めであっても、ペトロ、それは神から受け取った眺めではなくて、裁きの座に座った眺めではないのか、と言うのです。その直前の「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。このことを示したのは人間ではなく、天の父なのだ」それと、直後の「サタン、引き下がれ」。このときペトロは、感覚の違いを体験しているはずなのです。つまり、**中央の矢印**で受け取ったときの感覚と、善意ではあっても、イエス様に「それは人間の思いだ」と





言われたときの感覚。自分がどこにつながって何を受け取っていたのか、の感覚の違いです。イエスはそこで、2つのことを続けざまにペトロに体験させているのです。それが識別の土台です。

「イエスのミッションを生きる」というのは「私のミッション」ではないのです。私の自己実現とか、私にとってこうしたいとかでは、それがどんなに善意であっても、何か根っこがやはり「私」なんです。

イエスのミッションは、私たちがイエスのミッションに本当に与れば与るほど、ペトロが言うように、「もはや生きているのはわたしではない」となります。ペトロは消えてしまうわけではないんです。ますますはっきりと豊かに自分の命がそこに浮かんできます。神の似姿として。自分が否定されてなくなってしまうのではないんです。ただ、この椅子からは、自分が否定されてなくなってしまうという景色で眺める。

だから一粒の麦は、この机の上に麦があるとすると、麦には殻があって、「これは俺だ。俺は絶対にこの形を変えない。変えてなるものか。地に落ちれば、ふやけてきて水もいっぱいあって、なんだか体がふにゃふにゃになって、死んじゃうんじゃないか」と机の上の麦は思っています。机の上の麦は裁きの座に座った状態で世界を眺めていますから、絶対に落ちないほうが得だと思っています。だけど、本当の命は、落ちて、土や水や太陽、この日差しの暖かさの中で、私を変えられていくということを体験する中で、「なんだ、私の中にこんな可能性があったのか、私の命はこんなに豊かなものだったのか。あのつまらない麦め、と眺めていたあいつの中にもこんなに豊かなものがあるのか」と初めて悟っていくのです。

つまりそれは、この椅子に座った景色の中では、決して机の上から落ちようとは思えないということです。もし私たちがこの椅子からちょっと離れたところ、霊の息吹に息吹かれたところにいたら、「なんか自由な世界だ。本当に爽やかだ。本当に喜びに満ちている。私がこだわっていたあれをもしかしたら手放せるかもしれない」というような感じが現れ始めます。もう一歩進んだら、もしかしたら、もっと私たちはこの椅子とは違う景色に入っていくかもしれないのです。

だから、この椅子に座ったまま「ねばならない」という意識で何かをしていくことではなくて、この椅子から場所を移ることによって景色が変わっていき、それに対する私の反応が変わっていきます。それが、私たちキリスト者が招かれているということです。概念によるのではなく、体験的に変容していくのです。それは私の力ではなくて、息吹かれてのことです。もう風は吹いています。そのために神は人になられたのです。あとは、どこに風が吹いているのかに気づいていくことです。

### すべての人が聖性へと招かれている

では私たちは現実的に日常生活で何から始めていけばいいか。

風はアガペですから、本当に無償・無条件です。善人も悪人も、正しい者も正しくない者も一切区別しません。命そのものを全面的に肯定していますから。でも私たちはそうじゃない。「この人はいい人だから報われてほしい」「この人はさんざん人に迷惑をかけたからちょっとバチが当たったらいい」とか。そういうところから見ているわけです。でも神様はそうではありません。

では、この霊の息吹に私たちが気づいていくためにどこから始めるのか。それは椅子に気づいていくということです。

ギリシア教父の否定神学というものがありますが、それは直接神様をつかもうとはしません。そうではなくて、神様じゃないものを除けていくのです。一瞬神様に見えるけれどもよく見ると違う、と言って奥に進んでいくのです。私たちは、愛ではないものに私がつながっているときに気づいていくのです。それは少なくとも裁きの座にずっと座っていることから私たちを解放する力を持っています。

教皇フランシスコは使徒的勧告『喜びに喜べ 現代世界における聖性』(2018年3月19日 邦訳・カ

トリック中央協議会 2018年10月5日)の中で、第2バチカン公会議の教え(『教会憲章』参照)を踏まえて、私たちすべての人は聖性に招かれています。皆さん全員が聖人になるように、と語ります。聖人になるというのは、神父さんとか修道者とか、特別なところに行った人だけの話ではない、というのが第2バチカン公会議の宣言するところです。すべての人が聖性に招かれています。このことを確信をもって宣言しているのです。

だからマザーテレサは、「聖人になるのは義務です」とまで言っているのです。ユーモアを含めてですが。義務というのはどういう意味かと言えば、可能だということです。私たちは不可能なことは義務にできません。義務です、というのはできるからです。マザーが「義務です」と言ったのは「あなたたちはすべて聖人になれる」ということの可能性を言っているのです。

つまり、まったく愛の人になるということです。ただただ愛の人になるということです。一切を差別も区別もしない。でもそういうことは自力では無理です。自力でやれば、「私がやったんだ」というふうにして私と周りの人との区別がある。そういうものはないところです。では、どうやってその聖性の道に進んでいくのかというと、フランシスコはこう言っています。

聖なる者となるのに、司教や、司祭、修道者になる必要はありません。わたしたちは聖性が、日常のもろもろから離れて、祈りに多くの時間を割くことのできる人だけのものだと思ってしまいがちです。そうではありません。それぞれが置かれている場で、日常の雑務を通して愛をもって生き、自分に固有のあかしを示すことで聖なるものとなるよう、わたしたち皆が呼ばれているのです。(『喜びに喜べ』14)

主があなたを招いているこの聖性は、小さな行動を通して成長します。たとえば——ある女性がい買い物中に近所の人と会い話し出して、陰口になったとします。でもその人は心の中でいいます。「いけない。人のことを悪くいわないようにしないと」。これが聖性の一步です。(同16)

私たちは神の愛に触れているので、愛の味わいを知っています。だから私が愛じゃないものにつながっているとき、例えばものすごい嫉妬とか、ねたみとか、もちろん私たちの中に傷があって反応しているので、それを私たちが裁いてはだめなのですが、とにかく、私は愛でないものにつながっているなど瞬間的に気づいて、私はこちらに憧れていると、毎日の生活の中で自分の中に愛を確認していくのです。これはまったく人からは見えません。でもこれしかないと言っています。形ではないのです。

### テレジアにおける神への愛

そういうことをこつこつやってきた代表的な人がリジューのテレジアです。

彼女は15歳のとき、まだ早いと周りから言われても、神様への熱烈な憧れがありますから、入会したいと願い出て、16歳で着衣しました。着衣というのは正式にカルメル会の身分として認められるということです。彼女が帰天するのは24歳ですから、修道院では8年しか生きていないのです。やっていることは、お掃除とかお皿を洗うとかで、華々しい仕事をしたことはありません。それでも彼女は教会博士なのです。1997年にヨハネ・パウロ2世は、彼女は本当に神様のことをよく知っているとして、教会博士として公に宣言したのです。

どこから彼女は神様のことを知ったのでしょうか？ それは、「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そ

うです。父よ、これは御心に適うことでした」(マタイ 11 : 25-26 ; ルカ 10:21)。

つまり、裁きの座は、私が大きいのです。私が中心だから。そしてどんどんこの椅子を大きくしようという方向に力を用います。力、富、権力。でも幼子の道というのは、むしろこの椅子が小さい。神様の良さのほうをずっと見ているから、テレジアは、「自分は立派な先輩たちから見たら、足元の砂粒に過ぎない」と言っています。「ただ、私は最近パりにエレベーターというものがあるのを聞いたの。私のような若い者でのろいものがえっちらおっちら階段を上っていかななくても、スーッと上に行けるらしい。私は疑いもなく御父の御腕の中でエレベーターに乗って御父のところに行けると願っている」圧倒的に自分を見ていないのです。自分の中の椅子とか罪は見ているのですが、自分で自分を裁くとか、自分で自分をどうにかするとか、そっちではなくて、圧倒的に御父の力、愛のほうに惹きつけられている。だからリジューのテレジアは、毎日スプーンを磨くときもお掃除をするときも、ただ私の中に神への愛だけがあるようにと願って、それだけを確認しながら 8 年間を生きました。とても深く神のことを知り始めるのです。

### ザビエルの祈り

もうひとりがザビエルです。

ザビエルはこういう祈りをしています。「たとえ天国がなくても」という祈りです。

主よ 私があなたを愛するのは あなたが天国を約束されたからではありません。  
あなたにそむかないのは 地獄が恐ろしいからではありません。

主よ 私をひきつけるのは あなたご自身です。  
私の心を揺り動かすのは 十字架につけられ、侮辱をお受けになったあなたのお姿です。  
あなたの傷ついたお体です。  
あなたの受けられた辱めと死です。

そうです 主よ。  
あなたの愛が私を揺り動かすのです。  
ですから たとえ天国がなくても 主よ 私はあなたを愛します。  
たとえ地獄がなくても 私はあなたを畏れます。

あなたが何もくださらなくても 私はあなたを愛します。  
望みが何もかなわなくても 私の愛は変わることはありません。

ザビエルも天国とか地獄とか、全然興味がありません。天国に行くためにキリスト教を伝えているわけではないのです。中央の矢印でイエスと一緒にいる喜びだけです。もちろん、100%、120%天国です。だけど、裁きの座に座った状態で、「私が天国に行く」では、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の犍陀多(カンダタ)のように「俺さえ救われれば」と言った瞬間に糸は切れてしまいます。それは天国ではないのです。「俺さえ救われれば」と言って入ったところは天国ではない。そういう人ばかりだからです。反対に、友のために命を捨てる、そういう人ばかりがいるのが天国です。

### イエスとのつながりの中で

宣教するということは、まずひとつには、私一人のことではありません。「わたしはまことのぶどうの

木、あなたがたはその枝である」(ヨハネ 15:5)。イエスは何かをするのではなくて、つながりなさいと言っています。**中央の矢印**につながったら私と一緒に何かしよう。裁きの座に座って勝手に何かをやるのではなくて、**中央の矢印**につながって私と一緒に何かやろうと言うのです。何をするかは別に構いません。そのときの神の御摂理だからです。リジューのテレジアはお皿を洗っていました。もしかしたら違う場所ならカテキスタをやっていたかもしれない。あるいはお母さんをやっていたかもしれない。構わないのです。ただ、どんな聖人も例外なく一緒なのはイエスにつながっているということです。

宣教する共同体、教会とは、イエスのミッションを生きるものであり、イエスにつながっています。そしてそれは私ひとりではなく、私たちとして、です。私が救われればいいのではないのです。私たちが、です。そういう意味で、東京大司教区の3つの柱と対応します。「宣教する共同体」=宣教するということはイエスとつながった仲間たちの行いです。「交わりの共同体」=私ではなく、私たちです。「すべてのいのちを大切に作る共同体」=もちろん私たちの中にすべての被造物が入ってきます。

「宣教する教会—イエスと共に、イエスのミッションを生きる喜びに満たされて」をテーマに分かち合いましたが、まさにこの関町教会の保護の聖人である幼きイエスの聖テレジアとザビエル、この二人にこの教会は縁があるということは、宣教する教会ということの意味を味わっていくときに、すごく助けになります。

私たちの教会の本質、一緒に集まるとか何かをするとか、その部分は多少状況の中で変わってくるかもしれませんが、それでも、私たち一人ひとりがイエスにつながっているということ、この宣教の本質は、どんな状況であっても、たとえ牢屋に入れられていても、たとえ教会に行けなくなっても、そこは揺るぎません。ならば、牢屋にいて誰とも福音の話をしない状況であっても、この世界の宣教のために私たちはイエスのミッションを生きることができるのです。祈りを通じてこの世界に宣教しているのです。

リジューのテレジアは、ずっと囲いの中にいるのに宣教の保護者なのです。外へ出て行っていないのです。でも、宣教の本質が何であるかということや彼女の生涯、また観想修道者であるということから味うとき、今私たちは非常に厳しい制約下で教会の営みをしています。だからといって私たちの信仰や教会の姿が弱くなってしまうということはありません。私たちの本質は、私たちの内側で本当に一人ひとりがイエスにつながることにあるからです。

そのつながるということを具体的に生きるために私たちが日常生活でするのは、愛じゃないものに気づいていくことです。「俺が、俺が」という椅子に座った瞬間、例えば何か話をしていて、何か自分の意に染まないことを言ったときカチンと来る。そのカチンと来た瞬間に、「あ、これは椅子からの景色だ」と気づく。もっと本当の景色に生きたい。愛だけが溢れている場所に入りたい。そう思って、日々、椅子に気づき続けていく。それが聖性への道のいちばん確実なアプローチです。神と違ってつかむと、違うものをつかむ可能性がありますが、神でないものを除けていくのは確実なのです。俺さえよければいいというのは、明らかに愛ではないからです。ここではイエスにつながらないとふっと気づいて、イエス様はどこだったかなと探す。そこに向かって眼差しを向けるのです。

どうかこれからも関町教会がテレジアとザビエルの取次と保護のもとに、喜びに満ちた宣教をしていくことができるよう、心からお祈りしたいと思います。

[2021年2月21日 関町教会聖堂にて]